
銀魂 × BLEACH 管理局編

聖なる焔

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂×BLEACH 管理局編

【Nコード】

N4746S

【作者名】

聖なる焰

【あらすじ】

かぶき町ではったり会った銀時と一護は異世界『ミッドチルダ』に飛ばされる。

そこで不良魔導師達のリンチ現場に出くわし、リンチを受けていたユーノを助ける。

しかし、ユーノに黒い虚の仮面のようなものが現れ、ユーノは霊圧と共に転移し、どこかへ消え去る。

直後、二人は不良魔導師達の策略により、管理局に追われる羽目に！しかも、マテリアル三人娘の策略により、銀時を除く万事屋メンバ

ーと、ルキアと恋次、真選組の3人組と日番谷も、賞金首として追われていた！？

彼らを追うは元六課メンバー、茶度と石田、十一番隊、そして月詠！？

一方、ヴォルケンリッターのザフィーラも隠密機動に追われ、ミッドチルダを舞台に万事屋一行と一護達、そして真選組とザフィーラ達のドタバタ逃走劇が始まる！

OP『風のごとく』

ユーザー登録している方でも登録していない方でも感想書けます。

A・i 話『連載系の作品は気になるところで終わらせる』（前書き）

ども、始めまして、聖なる焰です。

夢はアニメスタッフです。

サバサバした性格ですが、よろしくお願いします。

この小説はVividが舞台です。 ヴィヴィオ達も出ます。

A・1話『連載系の作品は気になるところで終わらせる』

新暦79年。

森に囲まれた草原で

「あぐぽっ!？」

瘦躯の男がぶっ飛ばされた。

びくびくと痙攣した直後　　気絶した。

「ヤツキー!？」

「バカな!？　あの怪力のヤツキーが!」

仲間らしき男達（今やられたのを含め、93人の集団です）がどよめく。　ちなみに、男達は身体の一部一部にアーマーをつけ、杖か剣などの武器を持っている。

男達の前には二人の男が立っている。

片方の男の容姿はオレンジ髪に黒い和服、そして包帯に巻かれたデカイ“もの”を背負っている……最後に目つきが悪い。

男達は口を開いたオレンジ髪の青年に身構える。

もう片方の男の容姿は袖の短い黒ジャージの上に白い和服を左部分だけ着ており、下は黒タイツ（上の黒ジャージと繋がっている？）で、黒い長靴を履いている。　ちなみに頭の髪は水色がかった銀色の天然パーマで、目つきは無気力そうで、赤い瞳をしている。

「ギャーギャーうるせえ!！」

オレンジ髪と黒和服の男が叫んだ。

「テメーら全員……アレを見る!!」

オレンジ髪の黒和服は右に指を刺す。

そこには長い金髪にボロボロの緑のスーツに身を包んだ青年が俯^{うつ}せに倒れていた。その傍にボロボロの眼鏡も落ちていた。

「あの人はどうして倒れているのでしょうか？」

引き続き、オレンジ髪の黒和服は叫んだ時とは違う敬語口調で質問してきた。

「ハイ、真ん中のヒゲ!!」

乱暴口調に戻り、アゴヒゲの大柄な男に返してきた。

「ひ、ヒゲ……まあ、良い。それは、森に迷って、空腹で倒れたから」

「不正解!!」

オレンジ髪はアゴヒゲに向かって回し蹴りをかましてきた。

アゴヒゲは一歩下がってそれをよける……

が、

さっきまで黙っていた銀髪の男の蹴りがアゴヒゲの顔面にヒットし、口から血と共に歯がこぼれる。

「ふ、副隊長!？」

チンピラ風の男がアゴヒゲに駆け寄る。

「大丈夫ですか!？」

「ああ、なんとか……っ!？」

アゴヒゲの顔色が青くなる。　すると、腹を殴り……

「うええええええ」

四つん這いになり、腹ん中にあつた消化中のものを吐き出した。

「ギヤアアアア!？」

部下達が騒ぐ。

よく見るとゲロの中には小さい歯もあつた。　どうやら、抜けた歯が喉に入り、ゲロと一緒に吐き出したようだ。

「……えゝ、正解は脅える緑のスーツさんをテメーらがボコ殴ったからでゝす」

ゲロの臭いに鼻をつまみながら、銀髪の男が言った。

「う、ウソをつくな!

お、俺達は調査に……ってか、そもそも!　何を根拠にそんな事を!？」

若い男が否定するが、戸惑つてるのがバレバレである。

そして、天パーの男が片手を上げ、手首を曲げる。

すると茂みから老人が現れる。

「このおじいさんが証言してくれました」

「そうじゃ、コイツらじゃ!　コイツらがユーノさんを……」

そう、この老人が一部始終を見ていたのだ。

しかし、何故、この老人は青年……ユーノを助けなかったのか？
それは、この老人が小心者、すなわち恐れていたからだ。

「チツ、目撃者がいたか！」
全部吐き終えてスツキリしたアゴヒゲの男が杖を構える。

「ひいひいひい！！」
こ、コイツら……魔導師じゃあ！」
杖を構えたアゴヒゲに老人が脅える。

「あ？ ではんす……まど……なんだって？」
老人の言葉がうまく聞き取れなかったオレンジ髪は聞き返す。

「知らんのか！？ アイツらの持つてる杖は『デバイス』！
科学技術を膨張させた技術『魔法』を操るための機械、いわば操
作機のようなものじゃ！」

それらを使う人間は『魔導師』と呼ばブツ！？」
老人が解説してる途中にビーム弾が老人の頭に直撃し、老人はぶ
っ飛び、地面に倒れる。

「じいさーん！」
ぶっ飛んでいった老人に銀色天パーが叫ぶ。 特に心配してない
ようだが。

先程のビーム弾は男達改め魔導師達の一人の撃ったものだったの
だ。

「おい、テメエら……若い男（俺より年上みただけど）の次はこ
んなじいさんまで痛めつけんのか……？」
オレンジ髪は男達……改め魔導師達に怒りの眼差しを向ける。

「だ、黙れ！！ 貴様ら諸共もろともここで始末し」
小物っぽい細身の魔導師がマジで小物っぽいセリフを吐きかけるが、

「うらっ！！」

「テ カマ ゾマアアアアアアッ！？」

昔のSFアニメのキャラの名前を叫びながらぶっ飛んでいき、デカイ木にぶつかった。

「オルトオオンー！！」

「あのオルトンが反撃すら出来ずに！？」

またもどよめく魔導師たち。 ちなみにあの小物はかなりの実力者だったらしい。

「さあ……お仕置きの時間だ……！！」

オレンジ髪は背中に背負った包帯巻きのデカイものを持つと、包帯が取れて、

巨大な出刃包丁のような刃が出てきた。 取れた包帯は……否いな、晒ひは柄から伸びていた。

そして、その切っ先を魔導師達に向ける。

この刀……否いな、この斬魄刀ざんぱくとうの名は『斬月ざんげつ』という。

「テメーら全員、覚悟は出来てんだろうなア？」

銀色天パーが腰に差していた木刀を抜き、彼もその切っ先を魔導師達に向ける。

この木刀の名は『洞爺湖いづみこ』という。 その名は柄にも刻まれている。

「上等じゃゴルアアアア！！」

「ジジイと司書長ごとブツ殺したらアアアア!!」
151人の魔導師達は二人の男に立ち向かっていった。

A・1話『連載系の作品は気になるところで終わらせる』（後書き）

ちょっと編集しました。

BLEACHの新ストーリーはコンが主役かな？ 新ヒロインと結ばれそうな感じがするし

BLEACHの新OP良いですねえ。

A・2話『二人無双』

「んわたアアア！！」

銀色天パーは木刀を勢いよく横に振るい、向かってきた3人の魔導師を一撃でぶっ飛ばし、その勢いでぶっ飛ばされた魔導師の一人が回転し……

10人の魔導師達を巻き込み、ぶっ飛ばされたのを約14人減った。

続いて、魔導師4人をぶっ飛ばし、次に6人を空に打ち上げ、5人を木に叩きつける。

これら全て一振りずつやったのである。

結果、29人撃破。

「うおおおっ！！！」

オレンジ髪の新魄刀……の刃の面は約4人の魔導師をぶっ飛ばした。

「おら、次いい！！！」

オレンジ髪は刃の面で5人の魔導師をぶっ飛ばす。

「もらったアアアッ！！！」

上からの叫び声にオレンジ髪は上を向くと、ナイフを振り上げ、降下する魔導師がいた。

しかし、そのナイフの刃は通らなかった。何故か？ それはナイフの刃が片腕に当たり、折れたからだ。

生身の腕で……その驚愕により、魔導師は着地を忘れ、地面に倒れてしまった。

次にオレンジ髪の周囲から槍を構えた魔導師8人が！
しかし、オレンジ髪は回し蹴りでその刃を砕いた。魔導師達は
恐れをなし、逃げていった。

18人撃破。

「きいさああああ……」

オレンジ髪の後ろから先程ぶつ飛ばされた細身の男……オルトン
が現れる。後頭部から血が出ている。

「さつきはよくも……やってくれたなあ……？」

オルトンよりもやせた男……ヤッキーも現れる。

「テメーら、さつきの」

オレンジ髪は振り向くと、ヤッキーが回し蹴りをかましてきた！
オレンジ髪はその蹴りを掌で受け止めようとするが、衝撃が肘ま
で伝わる。

（なんだっ……この細身で、こんな……！？二番隊の隊長かよ！
？）

「驚いたか、黒野郎……俺の2つ名は『怪力』！

怪力のヤッキーじゃあー！」

ヤッキーは拳でオレンジ髪の顔を突く。しかし、オレンジ髪は
すれ違い際にかわし、刃の面をヤッキーの背中に叩きつける。そ
う、青白い水色の霊力を纏った、刃の面で。

「キイイイイイイッ！？？」

ヤッキーは奇声を上げ、のたわりまわり、痙攣した後、再び気絶
した。

「ウエオレン！？ウエオレンすっかりしろお！ウエオレン・ヤ
ックー！」

オルトンは気絶したヤッキーの身体をゆさぶる。

（ヤツキーってあだ名だったのか……）

「貴様アア何をしたア！！」

オルトンの問いにオレンジ髪はそう答えた。

「霊圧を込めた刃の面を叩きつけた」

「れいあ……？」

オルトンは聞き慣れない用語に困惑している。

「はあああっ！！」

次の瞬間、オルトンの目の前にヤツキー改めウェオレンの背中を叩きつけた刃の面が現れた！

対するオルトンは高速移動魔法でそれをよけ、

その次に、地面を蹴り、空に浮かぶ。

「空に、浮いた！？」

「飛行魔法。魔法の一種だ！」

オルトンは持っていた杖型のデバイス（持っていたのか）を地上のオレンジ髪に向け、その先端から落雷を落としていった。

オレンジ髪は落雷をよけていく。

「これも魔法の一種か！？」

「そうだ、砲撃魔法という。この雷は魔力変換資質というもので魔力を変換したものだがね！」

続けて落雷を落とす。

「他にも射撃魔法、魔力斬撃などがあり、防御魔法には」

言いかけた時、斬月の峰がオルトンの腹にめり込んでいた。

「悪い、勉強はしてつけど、テメーのは面倒くせえ」

「ヒドい」

その言葉を最後にオルトンは森にぶっ飛ばされていき、木々が倒れていく。

「ふう……」

霊子で構成した足場（不可視の足場）に乗り、オレンジ髪は肩に

斬月の峰を置くと、なにかぬるりとした感触に違和感を感じ、斬月の峰を見ると……

「うげっ!？」

峰に血がついていた。オルトンの腹にめり込んだ時、出血してしまったようだ。

「やつべーな……」

オレンジ髪はオルトン（の腹）の安全を心配しているようだ。しかし、自分であんなに吹き飛ばしておいて……

銀色天パーとオレンジ髪の闘い様を見たアゴヒゲとその部下達は恐怖により、青ざめる。

アゴヒゲの口が開く。

「こ、コイツら……バケモノか!？」

すると、空からオレンジ髪が降りてくる。そして、銀色天パーもアゴヒゲ達に向かってくる。

総計47人を倒したこの二人にアゴヒゲ達は恐れおののく。

「さっきの威勢はどうした？」

「き、貴様ら……一体何者だ!？」

二人は名を名乗る。

「坂田銀時」

「死神代行……黒崎一護」

そう、名乗った。つてか、死神代行？

「おい、お前ら」

オレンジ髪改め一護はアゴヒゲに向けて口を開く。

「逃げんのなら……今の内だぜ」

この二人の眼光にアゴヒゲ達の選択は……

「に、逃げろオオオオオ!!」

逃げる事でした。

しかし、それを見逃す二人ではない。

「待て、コラア!!」

「逃げんじゃねえぞ!!」

その後、46名の悲鳴が入った。

「ギヤアアアアア!!?」

こんな感じに。

A・2話『二人無双』（後書き）

次回予告は消しました。

章が終わった時に次回予告しようと思います。

それと、ニコニコ動画のタグ検索で出演作ダイジェストでスペース入れて、特定の声優さんの名前を入れたら（『出演作ダイジェスト

浪川大輔』って言う風に）、その声優さんの出演作が見られます。

（まあ、出ない事もありますが……）

声優さんの他に作品の名前も出すと良いと思います（『出演作ダイジェスト ハヤテのごとく!』みたいに）

では、また。

A・3話『虚の仮面』（前書き）

どーも、まどか マギカの最終話の感想と動画の一部を見た聖なる
焰です。

今回、超展開になりますのでご注意を

A・3話『虚の仮面』

「んで？」

一護と銀時の目の前には顔面が変形した上、縄で縛られた魔導師……三人がいた。残りは気絶している。

気がついたヤツだけ縄に縛って拷問しているようだ。

「なんでアイツを何十人がかりで殴ったりしたんだ？」

「実は……俺ら機動三課はろくに手柄が取れなくて……この辺を漁ってロストログアを探してたんですが……」

この辺にいたユーノ司書長に見つかっちゃって……」

「口封じのためにボコボコにしたと」

「ち、違う！」

銀時の言葉を魔導師の一人が否定する。

「アイツ、俺達を見るなりバケモノとか言って、チェーンバインドぶっ放してきたんです！」

「……は？」

「そして、俺達はソイツの腕を押さえつけて……」

「……ボコボコにしたと？」

「え、ええ……」

（……おい、どういう事だよ？）

（確か、あの爺さんの話じゃ司書長は社交的で優しい人だったって……）

（けど、コイツらの話じゃ危ない厨2by）

銀時がそう言いかけた時、

「う……う……」

俯せに倒れていた緑のスーツの青年……ユーノ司書長がうめき声を上げる。

「そっぴゃ、コイツ診てなかったな……」

一護は俯せになっていたユーノに駆け寄る。

ちなみに、一護の実家は『黒崎クリニク』という小さな病院で、人工呼吸くらいはマスターしている。

一護は状態を観るため、彼の背中をさわったあと、身体を返す。

「うわっ、女みてえな顔……」

ユーノの中性的な顔に驚いた一護は間の抜けた声を出す。

（乱菊さんか夜一さんにいじられそうだな……）

「って、あれ？」

しかし、一護は彼の顔に違和感を感じる。

「どうした？」

ちなみに銀時はチンピラ魔導師を見張っている。

「いや……こいつの顔さ……」

次に一護の一言が一瞬だけこの状況を揺さぶる事となる。

・ ・ ・ ・ ・

「傷1つねえんだよ」

「……はあ？」

「は？」

「え？」

「……え？」

銀時と魔導師三人は素っ頓狂な声を上げる。

「傷1つ……ない？」

「ああ、服以外、全然傷も汚れも……ん？」

一護はユーノの口を見る。

半開きの口、本来そこから見えるはずの白い歯、垂れた口蓋垂こうがいすい、太い舌、赤い口内が……ない。

それどころか、よく見ると黒い液体が口に詰まっている。

「な、なんだこりゃ……？」

一護は黒い液体に人差し指を入れた
その時、

人差し指の一節が一気に弾かれ、指が折れ曲がった。

一護の脳はあまりにも一瞬の出来事に痛みに反応する事が出来なかった。

そして

「ぎゃええええええええええええ！！？」

「お、おい、どうした!？」

銀時は一護に駆け寄る。

「ゆ、指が！ 人差し指が……っ！！」

「ちよつ、何コレ！？ 一体、なにをどうしたらこうなったの！？」

「くち」

□?

銀時はユーノの口を見る。

すると、口から黒い液体が溢れ出ている。

「口の、変なのに、指入れようとしたら、指弾かれて……」

「こうなっちまったと……」

状況を把握すると、銀時は一護の折れ曲がった人差し指に手をか

少年が口を開く。髪は茶髪、服は黒い。目元は影で隠れて見えない。

「ん？ なんだよ？」

モニターの前のイスに座っていた男が首を返す。やや低い声からして歳は青年のようだ。

「あれはどういう事だ？」

青年の声に怒気がこもっている。

「あれってなによ」

「どうしてユーノを選んだって聞いてんだ……！！」

声に怒気が増した。すると、少年の身体から霊圧が発生し、周囲の地面が抉られる。

「おう、怖いねえ」

「答える」

「あの司書長な、そっちと一緒に高町なのはと仲が良いそうだが恋愛関係ってわけじゃないそうだが」

「……そうか。それがどう……！？」

少年は青年の意図を察する。

「まさか……そのために？」

「そのためってなに？」

「姉さんやザフィーラ達と闘わせるためにユーノを……」

「なあに、お前の姉貴共だけじゃないさ。高町なのは、フェイト・

T・ハラオウン、そしてクロノ・ハラオウン提督……友人同士が争う様はカメラに抑えておきたい。

それに、高クラスの魔導師が相手なら良い実験になるしな」

ハアッハッハッハと青年は高らかに笑う。

「……チッ……」

その青年に少年は悪態をつき、その場を去っていく。

「どこ行くのよ、きよみ」

名前を呼ばれ、少年はドアの前で立ち止まる。

「散歩がてらにユーノの様子を見に行く……」

そう言いかけた少年……きよみは

「行きます 確かこの近くに送ったんですね？」

先程までの乱暴な口調から敬語に言い替えた。

「いや、クラナガンに変更した」

「クラナガン……首都クラナガン？　なんでそんな所に……」

「あそこには高町なのはの義理の娘、高町ヴィヴィオがいる。母のピンチにや娘も駆けつけてくれるだろ。それに」

「その娘の実力も見ておきたい、と？　……フン、勝手にしてください」

そう行つて少年……きよみはドアノブに手をかけた時、ふと思つたように後ろを振り返つた。

「もしや、あの死神代行という方と天然パーマの方も、ユーノと闘わせるのですか？」

「当然だろ、データも入るし」

答えを聞くときよみは舌打ちし、ドアを開け、そのまま立ち去つた。

きよみが出ていった後、青年は端末を操作する。

「さて……」

画面端末には、長い金髪の女性『フェイト・T・ハラオウン』と、金髪に頭の両脇に小さなツインテールをしたオッドアイの少女……『高町ヴィヴィオ』の顔写真が写っている。　どうやら高町家のデータを調べているようだ。

「……ほお、なるほど……ん、居候？」

データに『家に居候がいる』という記述を見る。　少し気になつた青年はページを少し下に下ろしていく……その居候の顔写真が写っていたのだが……

「なっ、なにっ！？　これは……」

長い紫髪を後ろにまとめ、黄色い瞳をした褐色の女性の顔が写っていた。　青年はそれを見てこう呟いた。

「四楓院……夜……！？」
何故ここに！」

A・3話『虚の仮面』（後書き）

今回出てきたきよみくんはキーパーソンの存在になると思います。
これ出した直後に予告編みたいなの出します。

十一月二日AM0:34、きよみくんの台詞を修正しました

物語は動き出す！！（前書き）

予告編的なものになります。

この話に出てくるセリフが本編に出るとは限りませんので、ご注意を

物語は動き出す！！

「夜一さん、夜一さん！」

オッドアイの少女ヴィヴィオが階段を降り、居候の女性の名を呼ぶ。

「なんじゃ想像しい」

褐色の女性、夜一が現れる。

「夜一さん！！ ゆ、ユーノさんが……街で……」

「落ち着け。 最初から話してみい」

夜一は焦るヴィヴィオをなだめる。

「はい……ユーノさんが……なのはママの友達のユーノさんが……」

「ユーノがどうした？」

「ユーノさんが街で暴れてるんです！！」

「暴れてるじゃと？ 酒に酔って？」

「違います！ 黒い仮面被ってて……」

「黒い仮面？」

夜一は首を傾げる。

「いつも以上に魔力が大きくて……なのはママとアインハルトさん達でも太刀打ち出来なくて……」

「あのなのはとアインハルト達が？」

こっから先のナレーションは岩田光央さんで脳内再生してください。

「よし、ワシも行こう」

「本当ですか！？」

「アインハルトはゴロツキを数人ほど倒しているし、元よりあのな

のはがユーノなんぞに太刀打ちできぬなど、考えられん。
黒い仮面とやらも気になるしの」

そして今

「ユーノくん……」

「ア”……ア”……な……のは……!!」

物語は動き出す

ある者達は

「ちきしょオオオオオオオオ!!」

「なんで俺達^がこんな目に遭わなきゃいけないんだよ……!!」

「それはね、恋^{れん}じゃん、アタシ達が賞金首^になってるからアルよ」

「金額は約五十万だそうだ」

「だから、それがわかんねーつつつてんだろーがああああ!!」

元いた場所に

「俺達は警察だ」

「ああ、ちと乱暴だが、警察だ」

「ヤクザがつきますけどね」

「僕達も世界のバランスを守る護廷十三隊^{だけ}だ」

「なんで、宗教や管理局に追われてんだよ……」

「それは俺達が賞金首^になってるからですぜ」

「だから、それがわかんねえつつつてんだよ!!」

帰るために

「全てはあの黒猫と俺のせいだ」

「否、あの黒猫こそが、四楓院夜一こそが事ことの元凶」

「いやいや、朽木隊長だって黒猫に斬りかかってきたじゃないですか！ だいたい、あの猫、四楓院元隊長じゃなくて、ただの猫じゃ

……」

「まあまあ、みんな前向きに行こうじゃないか」

「己けが前向きすぎるんじゃないか！」

「兄けいが前向きすぎるのだ」

「桂さんが前向きすぎるんでしょうが！」

次にある者は

「ア” アアアアア！！」

「なのはさん、よけて！！」

「何を呆けておる、貴様……死にたいのか」

大切な人のために

「いくで、狛村さん」

「うむ」

またある者は

「俺達は、世界を滅ぼせる兵器を……」

「我々は、1つの街を滅ぼせる虐殺兵器を……」

「お互い目的のものを手に入れるまで」

「盟友の盃を」

「乾杯」

己が欲を果たすために

「ウヒヤツヒヤツヒヤ！ これは愉快！」

「そこ行けめーがね！ そこ行けめーがね……あ~~~~！」

「彼らには悪いと思いますが……面白いものですね」

「うむ、これほど良い映画は見たことがない」

果たすために

「……フツ、……フハツハハハ……ハ——ッヒヤヒヤツハツハツハツハツハ」

こいつは良い実験になりそうだ……ハハツ！
そう思うよなア……ええ！？

またまたある者は

「その服……少々軽装すぎじゃないか？」

「失礼ねえ、これはバリアジャケット！ アンタの白服こそ弱そうじゃない！」

それに何よ、そのヒラヒラ！？ なんか金持ちみたいですっごくム力つくんですけど！」

「失礼な、これは……」

「あの二人……ホント仲良いですね。ねえ、さどさん」

「ああ、ほんとにな」

己が信念のために

「つつつつい、ついでー！」

「つつ……つつ……つつ……ついでー！」

「ついついつい、ついー！」

「つい……つい……つい……ついー！」

「突いて、突いて、突いて、突いて、」

「突いて……突いて……突いて……突いて……」

「突いてえーっ！っ！」

「突いてえーっ！っ！」

「突いつ、どぱっん」

「突いつ、どぱっん」

「……テンポ早くしろエリオオオオ！！！」

「うえっん！ もうやだっ！」

「テメーは女か、エリオオオ！！！」

「男ですっ！！！」

「男なら泣くんじゃねえ！！！」

「うわっっん！！！」

「わぁ……綺麗……」

「そうでしょ？ こーいうのが……」

「キユクッ（泣）」

またまたまたある者は

「姉ちゃん……」

俺は……

いや、無^ねえな。 というか、あった方がおかしいだろ、きよみ……

……」

何かのために

「行くぜ……」

銀さん」

闘うために

「おう……」

一護」

その者達が出会った時……

物語は、動き出すッ！！！！

銀魂ア！！！！ BLEACHイ！！！！
銀魂×BLEACH 一管理局編

ス、タアアアトオオッ！！！！

物語は動き出す!! (後書き)

さあ、次回からは第2話……いえ、第一話のBパートに突入します。気づいてると思いますが、サブタイトルを第1・話形式に変えました。

ちなみに前回、空気になっていた魔導師たちは隙を見つけて逃げようとしたら、銀さん達に見つかり、フルボッコにされました。

B・1話『逃亡!』（前書き）

新八達のターンです。

そろそろOPとEDの構成仕上げないとな……

B・1話『逃亡!』

ビルに包まれた街を四人組が走っている。その後を追っているのは、機械的な杖を持った男達。

「ちきしょオオオオオオオオ!!!」

叫び声が木霊する。

叫んだのは四人組の一人の少年。

髪は丸い黒髪、顔つきは今は少々崩れているがやや綺麗な童顔、その目に眼鏡をかけている。

服には青縁の灰色の和服と青い袴を着用した少年。

「なんで俺達がこんな目に遭わなきゃいけないんだよおおおお!!!」

次に叫んだのは赤毛の男。

髪は、後ろにまとめた赤毛、左のこめかみのところで結んだ白いハチマキ、顔つきは眼鏡の少年よりも少し細く、アゴが少し長く、本来目つきは鋭いのだが、今は大きく見開かれている。

服は、袖の大きい黒い和服に黒い袴を着ており、腰には刀を差している。

「それはね、恋^{れん}じゃん、アタシ達が賞金首になってるからアルよ」
赤毛の男に向けて言ったのはチャイナ服の少女。

髪はオレンジ色のセミロングを両サイドでぼんぼり団子にしておまめ、その上に黒いアクセサリ（？）のような黒い半球体を被せている。目は大きく、瞳は可愛い青色。

服は、金の縁のついた袖が長く大きいチャイナ服を着ている。

おかしな所は・・雨でもないのに紫の傘を差しながら走っている所か。

「金額は、全員約五十万だそうだ」

続けて言ったのは黒い髪、黒い和服の黒一色の小柄な少女。

その黒い髪の形はやや丸いセミロングで後髪が少し跳ね上がっており、真ん中辺りの前髪が左斜め下に向かって伸びている。

目つきは丸いが、端でとがっており、その中の瞳の色は黒い。

服は赤毛の男と同じ黒和服に黒袴。もちろん腰には鞘のついた刀が差してある。

「だあつから、それがわかんねーつつてんだろーがああああ！！」

赤毛の男はまたも叫ぶ。

「大体、俺達は何したよ！？俺はルキアのおんみつしか……あ」

「なん……だと……！？」

ルキア……小柄な黒和服少女は赤毛の男を睨みつける。

「恋次……あれは貴様の事だったのか……！！」

ルキアは腰に差された刀の柄に手をかける。

「ちよつ、待てルキア今はそんな時じゃねえだろ！」

「問答無用！」

そう言つと、ルキアは腰に差した刀を鞘から抜き、

「舞え……袖白雪……！」
そでのしらゆき

力の入ったその言葉と共に、四角かった刀の鍔が白い円形に変わり、刃と柄の色が純白に変わる。柄の後ろに晒がついている。

これこそがルキアの斬魄刀『袖白雪』。そでのしらゆき前回の一護の斬魄刀『斬月』と同じ斬魄刀であり、ルキアと恋次は斬魄刀を操る死神である。

ちなみに一護はその代行者である。

斬魄刀にはそれぞれ能力があり、その能力は普段は封印されているが、その能力の開放を『始解』と呼ぶ。一護の斬月是最初から始解に入っている常時開放型の斬魄刀である。

「ちよつ、ルキアさんなにやってんですか！？ やめ」

「参の舞……」

新八の言葉を見殺し、ルキアは謎の詠唱と共に純白の刀の前に氷を作る。

「白刃！！」

氷で長くなった刃を恋次に向けて振るう。

「うわわわわわわーわーわーわー」

恋次はそれを屈んでよけ、イカレたように変なわわわわ声を口走る。

「ちよつ、恋次さん！？ 大丈夫ですか！？

ってか、ルキアさんも何やってんすか！？ 今はそんな場合じ

や……」

新八達は走っています。走ったまま口論してます。

「下がれ、ダメガネ！！ 貴様も斬り殺されたいか！！」

追っていた魔導師達も一行の様子に気づく。

「お、おい？ なんか様子がおかしいぞ」

「あ、ああ。仲間割れか？」

「加勢するアルよ、ルキア。新ハイイ、いつぞやの炒飯の恨み、今ここで晴らしてくれるわアアア！！」

「お前もかいいいいいい！！ ってか、炒飯って、あれは銀さんが……」

「「誠死ねエエエエエエー！！」」

二人はそれぞれの得物（神楽は傘）を振るい、二人をぶっ飛ばす……しかけるが、二人はそれをかわす。

「ま、誠って、」

「誰だあ!？」

新八と恋次は謎の叫び声に交互につっこむ。 流石ツツコミコン
ビ。

「死んで詫びろ、恋次!」

「死ねエエエ新八イイイイ!!!」

「どわアアアア!!!」

新八達は走っています。 いつの間にか管理局からルキアと神楽に追われる身となりました。

「お、おい、死ねとか言わなかったか今!？」

「あ、ああ。 一体どうなってんだ!？」

新八達の拳動に魔導師達も不審に思い始める。

「へ、ヘルペス!! ヘルペスミイイイイイ!!」

「し、新八、ヘルプミー! ヘルプミーな! ヘルプミイイイイイイイ!!」

「死ねよやああ……あ!？」

突然、ルキアと神楽の足が止まる。

「ん!? どうした、アイツら!？」

「んな事良いから逃げますよオオオ!!」

「え、逃げるって……アイツら追ってこなく……」

恋次は本来、自分達を追っていた人間の事を忘れていたようだ。

「うしろオ!!」

「あ?」

恋次は後ろを振り向くと魔導師達が迫っていた！

「……あー、いたなこんなヤツら……って、逃げろおおお！！！！」

恋次は新八に続いて逃げる。

「逃がすかぁ！！」

「追えエエエ追うんだアアアア！！！！」

その後、新八と恋次はなんとか路地裏に逃げ込んだ。

B・1話『逃亡!』(後書き)

まだまだ続きます。

B・2話『対峙』（前書き）

どーも、スランプになつてゐる様子の聖なる焰です。

原作でいつも強すぎる敵にぶちのめされてばかりいる恋次に見せ場を作ってます。

恋次ファンは終盤に注目！

B・2話『対峙』

二人は地面に尻を預け、息を切らしていた。

「はぁ……はぁ……もう追ってきませんよね……？」

「多分な……」。

しかし、なんでアイツら急に……」

「アイツらって……神楽ちゃんとルキアさんの事ですか？」

「ああ」

「そういえば、あの二人、あれつきり追ってこなく……」

新八がそう言いかけた時、

「その二人ならここにいるぞ！」

大きな声と共にスポットライトが二人を照らす。二人は光から目を腕でかばう。

照明が消えていき、声の主が現れる。

その男とは……

「ああっ！ アンタはっ！？」

「俺達を追っていた！」

新八達を追っていた魔導師達の隊長だった！ ちなみに身長は高く、ほぼ痩せた体格をしている。

「フフフ、これを見る！」

そう言うのと、隊長は人差し指を後ろに向けると、

「か、神楽ちゃん！！」

「ルキア！？」

縄に縛られ、大柄な魔導師に背負わされた神楽とルキアが！ しかも二人とも皮膚の一部一部が黒く焼けており、目を回している。

「二人を人質にして僕達を捕まえる気か!？」

「話が早いな、さあ大人しく……」

「ちよつと待て!! テメーら、どうやってその二人を捕まえた!?
つーか、どこに行つてたコイツら!？」

恋次の戸惑いも最もだ。

ルキアは死神が使う魔法のような術『鬼道』の達人、神楽も岩すら持ち上げる怪力の持ち主、どちらも実力者だ。その二人が大勢とはいえ、魔導師達に負けるとは思えない。

「ああ……ファミレスで食い物くれとか言つて立てこもつてな」

（オイイイイイ、なにやってんの神楽ちゃんんんん!？）

（なにやってんだよルキア!？）

「通りすがりの赤いサラサラヘアーに、左の頬にバーコード、黒いコートの魔導師にやられ、そこを我々が回収し……今に至ると言うわけだ」

「多い!! 魔導師の特徴多いわ!!」

「つてか、あの二人を倒したつて……その魔導師つて一体……!？」

「まあ、良い。コイツらの命が惜しくば投降しろ」

「はっ! 俺達がんな脅しに乗ると思つてんのか!？」

「ほお、この二人の命が惜しくないのか。」

ひどいなあ、最低だな」

隊長は卑しい口調で恋次を挑発する。

（どうするんですか、恋次さん?）

（ああは言つたが、俺も二人が心配だ……とりあえず隙を見て……）
新八と恋次は小声で作戦会議を行う。
そこで……

「隊長! ランスター執務官が……」

部下の一人が何かを報告する。その時、魔導師達の目がその男にいく。

「今だ、新八!!」

「はいっ!!」

その隙を逃さず、新八と恋次は一気に駆け抜ける。

隊長は口を開ける暇もなく、恋次の草履に顔を踏まれ、倒れる。

新八は腰に差していた木刀を抜き、

「せえええ!!」

神楽とルキアを抱きかかえていた魔導師の腹を突く。その一撃

に魔導師は吐血し、二人の少女を落とす。

「神楽ちゃん!! ルキアさん!!」

新八は地面に落ちた二人の少女に駆け寄り、その名を叫ぶ。

「どうだ、新八!？」

二人の安否が気になる恋次が新八に二人の様子を聞く。

「大丈夫です、気絶してい……」

新八がそう言いかけた時、恋次の後ろに魔力を纏った杖を振り上げる隊長が!

「恋次さん、後ろっ!!」

恋次はなにと後ろを振り返った時、

隊長が杖を振り下ろし、恋次の頭に直撃した。

「恋次さん!!」

「フッフッフ、一人目捕獲……ん……?」

隊長は恋次に叩きつけた杖を見ると、

ボキッと折れて、地面に落ちた。

「は……え? え、えあ、あ、ああ!？」

隊長は自分の杖が折れた事に困惑している。

「いつ……てーじゃねーかコラ!!」

恋次は隊長の襟首を掴み、額をぶつけた。

「へらっ……!？」

数歩後退すると、隊長は仰向けに倒れ、気絶した。

「た、隊長!？」

「野郎、なんて石頭だ!」

隊長が気絶した事に部下達は驚く。

「れ、恋次さん! 大丈夫なんですか!？」

「俺は副隊長だぜ? あんな杖でやられると思ってんのか?」

（ふ、副隊長?）

（組織なのか?）

魔導師達は念話で話していると、

「やれやれ……相変わらずだね、阿散井くん」

B・2話『対峙』（後書き）

最後の声は……BLEACHファンならおわかりでしょうね。

B・3話『再会、そして……?』

上から男の声がした。　なんかエロい男の声がした。

恋次達はもちろん、魔導師達も上を向くと、

男がベランダの上に立っていた。

男の髪は黒髪で、整った顔立ちの上に眼鏡をかけている。　服は

白い西洋的なもので、

肩には短いマントのようなものをかけ、

胸のところではピンのようなもので止められている。

恋次はその男の顔を見て、こう言った。

「石田……!」

なんだ貴様、何者だ、と魔導師達が叫ぶが、若い女のかき消される。

「民間協力者よ、私の」

声の主は女性だった。

髪はオレンジのストレートロングヘア、

服装は縁の青い白ジャケットに、

その下に胸元が赤い黒ワンピース、

腰には上のジャケットと同じ色合いのスカート、

その上には銃が収納されたポケット……のついたベルトが巻かれている。

「こつ、これはランスター執務官殿!？」

魔導師達が一斉に姿勢を正す。　どうやら、あの少女は高位の職に就いているようだ。

「何故、凶悪事件担当のランスター執務官がここに……」

「ティアだけじゃありませんよ！」

「俺達もいる」

活発な少女の声と渋い男性の声が聞こえた。声の主が顔を、いや姿を現す。

一人は少女。

髪の色は紫、顔立ちから見れば十代後半か。

女の方は胸の部分に水色のラインの入った黒いシャツ、その上に青いラインの入った白いコート、

両腰にアーマー、

水色の短パン……更に特徴的なものは右腕に巨大な籠手、

両足には機械的かつほぼ巨大なスケートブーツ、

そして額に巻いたハチマキ。

もう1人は大柄な男性。

黒い前髪で両目が覆われ、顔の肌と大きな両腕から見られる褐色の肌、やや厚い唇、良い体格から20代と思われる。

服装は上半身にピンクのアロハシャツ、

下半身にはジーンズと、やけに現代的な格好をしている。

「れ、^{レスキュー}特別救助隊の、な、ナカジマ防災士長！」

「どうして特別救助隊が……！？」

魔導師達がざわめきだす。

「な、なんですかあの人達？　なんか偉い人っぽいんですけど……」
「……チャド……」

恋次は大柄な男にそう呟いた。

「チャドじゃねえか！？　お前、どうしてここに……」

「阿散井……」

大男が口を開く。しかし、次に返ってきた言葉は……

「お前達、何をした？」

B・3話『再会、そして……?』(後書き)

次回、バトル突入!

なんか展開が早いので、ご注意を

B・4話『衝撃の結末』（前書き）

どーも大変お待たせしました。

しかし、最新話なのにggdggdになってしまった……

B・4話 衝撃の結末

-
-
-
-
-
-

沈黙がこの場、路地裏を支配する。

「は？」

「いや、だから、お前達、何をしたんだ？ 賞金首、しかも五十万なんて……」

「……いや、それはこっちが聞きたいぐらい……」

「まあ、何にせよ」

オレンジ髪の女は腰のポッケから銃を取り、

「事情を聞いた方が良いわね、力尽くで」

「そうだね、ティア！」

オレンジ髪は銃を、

青髪の少女も拳を構え、

続けて石田と呼ばれた眼鏡の青年も蜘蛛の巣状の光を形成し、

大男もボクシングの構えをとる。

「ちよつ、ま、まさか……!？」

おどける新八は思い出そうと思考する。さつきオレンジ髪の女が石田達を「民間協力者よ、私の」と言っていた……。まさか！

「ま、まさかお前ら、ソイツらと!？」

恋次も声を荒げ、眼鏡の青年に返答を申し込む。

「実はちょっと前に……」

次の瞬間、石田のセリフはかき消される事となる。

G I S H A A A A A A A A A A A A A A A

A
A
!
!
!

どこからともなく路地裏に響いてきたこの叫びはその場にいた者

達の耳をつんざき、ある者は耳から血を噴き出し、氣絶、またある者は鼓膜を破られ、血が垂れ出る耳を抑える。

新八達と石田達は鼓膜が破れぬように耳を抑えている。

やがて、叫び声は止むと、路地裏にいた者達は皆、氣を失い、そのまま倒れた。

首都クラナガンは燃えていた。

ある者は逃げ惑い、

ある者は死に絶え、

またある者は人を助け、

またある者は立ち向かう。

この都を燃やした仮面の怪物に。

G I S H A A A A A A A A A A A A A A

A
A
A
A
!
!
!
!

B・4話『衝撃の結末』（後書き）

いやーマジggdgdでしたよねえ……？

ネタバレになるかもしれない説明

叫び声は怪物のもので、近くにいる人間にはただのうるさい鳴き声にしかな聞こえませんが、遠くに行くと言くほど音波になってしまいうけですよコレが

しかし、声には催眠効果もありまして、気絶してしまうわけです。恋次達は倒れましたが、意識は失っておらず、身体が動かないといった状態です。新八は強くても人間、そのまま眠ってしまったわけですから（新八エ……）

さて、次はなのはさん出ますが……原作のようなのはさん活躍できるかどうかわかりませんので、ファンの方はご注意ください

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4746s/>

銀魂×BLEACH 管理局編

2011年11月11日02時53分発行